

# 私のことを私が好きならそれでいい

## ～K-POP とラップから見る現代女性心理

### ●世界的女泥棒4人組参上

2023年4月のある日、インスタグラムを見ていたら知らない映像が流れてきた。韓国のK-POPのガールズグループだ。ブラックピンクという。見たら私は一瞬ではまった。

K-POPだからスタイルが良くてルックスも良くてダンスが上手いのは当然だがブラックピンクは飛び抜けてる。スピードとキレが違う。特にリサのダンスが凄い。どんなダンサーより高速に動き、誰よりもたくさんの細かな動きが次々と繰り出される。脚がとても長く細い身体は、時にシャム猫のように、時に蛇のようにくねくねとなる。手の指も弧を描いて反りかえり、1本1本の指がまるで扇子のように閉じたり開いたり、ひらひらと舞う。

リサは1997年生まれのタイ人（母親がタイ人で両親が離別か死別かしたらしく、次の父親はヨーロッパの白人）。なるほど、タイの民俗舞踊のみならず、インド、インドネシア、中近東の民俗舞踊やベリーダンスの要素も感じられる。そしてあの高速感はタイの格闘技ムエタイを思わせる。リサは日本で活動している女子K-1格闘家パヤーフォン・バンチャマークの遠い親戚だというから、血は争えない。もちろんアメリカのヒップホップダンサーなどがこれまで築き上げてきた要素もぎっしり詰まっている。パリのクレージーホースのダンスのようなところもあるかもしれない。それらがすべて融合し、物凄いスピードが加わって、今まで見たことのないダンスが生まれたのだ。



というわけで本章は K-POP について試論的エッセイを書くが、K-POP 全体について調べて考える余裕は私にはないので、あくまでブラックピンクと、その妹分のベビーモンスターを素材にして、現代の女性の心理を考えてみたい。私は K-POP だけでなく音楽評論や音楽社会学の専門家でもないので、誤認識もあると思うし、思いつくまま書くので論理展開は特にならないが、まあ大目に見て下さい。

### ●男のための存在ではない

K-POP のガールズグループは 2007 年の少女時代、kara から日本でも人気があった。だが、かわいい、きれいな、スタイルの良い女の子が歌って踊っているが、ブラックピンクのような男性何するものぞという雰囲気はなかったと思う。

対してブラックピンクはセクシーでかわいいのにあまり媚びていない。そして、そんなに簡単に男の手には落ちないよという意味の歌を歌う。マンガでいうと「ルパン三世」の峰不二子のようなキャラクターなのだ。

2023 年 4 月、カリフォルニアのコーチェラという音楽祭でのブラックピンクの最初の曲「ピンクヴェノム」のパフォーマンスは圧巻だった。ステージに登場したときに四人とも黒いジャケットを肩にかけてポーズを取ったのだが、まさにこれは世界的女泥棒 4 人組というイメージを強烈に打ち出していて、一気にブラックピンクワールドに観客を引きずり込んでいた。

またブラックピンクはステージに登場したときや各曲の最初に「ブラックピンク・イン・ユア・エリア！」と言うのだが、これは「ブラックピンク参上！」という意味だろうから、まさに大泥棒の決め言葉だ。もちろんこの泥棒は男の心を盗むが、男の手には落ちない。実際私は大阪での公演を見に行ったが、客の 9 割が女性だった。

あるメディア社会学者に聞いたところ、最近の女子学生は峰不二子が好きらしい。女としての魅力はある。でもそれは自分のため。男のためではない。男の物にはならない。そういう世界観に若い女性が共鳴する。芸能人に上納される女性とは違う。

「勘違いしないで 私が微笑むのは自分のため（あなたのためじゃない）」と彼女たちは歌う (DDU-DU DDU-DU)。男たちを銃撃するアクション。DDU-DU DDU-DU とは「ダダダダン」という銃声だ。軍隊風敬礼 (KILL THIS LOVE)。「ドアを蹴り開ける」という歌詞は何度か使われる。ドアは男社会の壁のメタファーだろう。

そもそもグループ名 BLACKPINK は、女性的な PINK に非女性的な強さの

BLACK を合わせることで、外見や女性らしさという既存の尺度を否定する意味があるらしい。ブラックとピンクではなく、ブラックがかったピンクという意味だ。

また C や N の文字を反転させることで、固定観念の打破と原始的本質への回帰を促すという。簡単に言えば強いけど可愛い女性という矛盾を統合した存在という意味であるという。それは現代の女性が持つ願望だ。

こういう女性の価値観の変化を私は最近駅に貼られた広告ポスターに強く感じた。これは脱毛サロンの広告なのだが、ブラックピンクの 2023 年のコーチェラでの衣装に少し似た服を着た美しい女性 3 人が並び、「私のことを私が好きならそれでいい LIVE NAKED」というコピーだった。広告表現のレベルがこの 30 年間で低下してきた中で、1970-80 年代のように広告に時代を感じるということも少なくなったが、このコピーは久々にそういう時代の変化を非常に上手く表していた。「LIVE NAKED」(裸で生きろ) というコピーは 1970 年代のパルコの傑作広告「裸を見るな。裸になれ。」を思わせるが、脱毛をして美しい裸をつくり上げた女性が、しかしそれは男の性的視線を集めるためではなく、私が好きな私になるためだと宣言するのである。

アメリカの今や世界的スターであるティラー・スイフトもそうである。身長 180 センチ以上でスーパー・モデルのようなスタイル。真っ赤な唇。長いまつげ。光り輝くラメの、露出の多い衣装。バレエやアメリカのエンターテイメントを取り入れたダンスはフェミニンであり、女性が男性を喜ばせる存在だった時代の女性に外見的には見える。だが彼女は男性に媚びない。男性社会で生きる女性への応援歌のような歌も歌う。逆に言えば、先進国でも男性優位社会の壁は厚いということだ。



### ●多国籍軍

ブラックピンクのメンバーは皆美しく、4人がそれぞれディオール、カルティエ、シャネル、カルバン・クライン、ポルシェ、セリーヌ、ブルガリ、M・A・C、ティファニー、イヴ・サンローランといった高級ブランドのアンバサダーを務める。リサは『VOGUE』の表紙にもなり、25年にはアカデミー賞でダンスを披露した。四人とも世界的セレブだ。

ヴォーカルの中心のロゼは韓国人だが 1997 年ニュージーランドに生まれ、12 年、オーストラリアのシドニーで行われた YG エンターテインメント（ブラックピンクの所属するエンターテイメント企業）のオーディションに参加し、練習生となった。

ジェニーは1996年ソウル生まれだが、9歳から14歳まで、ニュージーランドへ留学。その後韓国へ帰国し、憧れていたYGエンターテインメントのオーディションを受け練習生となった。ボーカルの中でもラップ担当。ジェニーのルックスは昔ならいわゆる「お嫁さんにしたい」タイプなのだが、顔をしかめて激しいラップを歌う。

もうひとりのジスだけが韓国だけで育ったネイティブだ。韓国最高の美女と言われ、女優としても人気がある。ダンスは4人の中ではいちばん普通だ。体が硬いせいだろう。だが体の硬さを活かしたダンスにかえってクセになるセクシーがある。「フラー」 という曲のダンスを見たら男性はみな悩殺される。

このようにブラックピンクは個性派の「多国籍軍」である。ブラックピンクの妹分であるベビーモンスターは、韓国人、タイ人、日本人の混成であり、さらに多国籍化が進んでいる。

他のK-POPグループもそうなのだろうが、タイ人までいることに私は最初驚いた。実際リサはK-POP最初のタイ人なのだ。4人のルックスもキャラも違い、ダンスも同じ振り付けを集団で同調させる通常のK-POPや日本の坂道系とは異なり、ひとりひとりが少しずつ違って4人が絡み合うように動く。そこが個性重視の時代に合っている。



ライブ会場前 2023年京セラドーム

### ●女性にとってのラップ

ブラックピンクの歌はラップ主体のものだけではない。ポップスもバラード

もある。中島美嘉の「雪の華」も歌う。だが最近のK-POPではラップが入るものが多いらしい。

ラップを取り入れたK-POPが広がったのは2012年に韓国人ラッパーPSY(サイ)の「江南(カンナム)スタイル」が世界的に大流行したのがきっかけらしい。ブラックピンクを聴いているうちに、ラップとハングル語の相性がよいのだと私は思った。

ハングルとラップの相性の良さについては野間秀樹『K-POP原論』に詳しい。英語などと同様、同じ意味のことを歌うとき、日本語より音節が少なくてすむのでリズムに乗せやすいのだ。子音が強めで激しい印象を与えるのもラップに適している。

またラップは不満を表現する手段を女性に与えたと思う。それはベビーモンスターの2025年3月の横浜公演を見て、日本人メンバーのアサがラップを歌ったときに思ったのだ。アサのラップはとても激しく速い。アサはすっぴんをだとまだ幼さの残る少女だが、目力強めの化粧をすると急に大人びて、それで高速ラップを歌うと、とても強い女性に変貌する。「ああ、女性が強い表現をするときにラップは最適なのだ。日本語だとここまで強気を示せないだろう」と私は直感した。

昔の日本なら女性の不満は演歌によって歌われた。しかしそれは男性社会への不満ではなく、あくまで特定の男性への不満である。そして不満を我慢するのが女性の芯の強さであり魅力であるという価値観の中での表現にすぎなかった。

アメリカのブルースでもそうであろう。白人社会への不満を歌うブルースは演歌よりは社会性があるが、基本的には不満を悲しみとして歌う。それが胸を打つのだが、不満をガンガンぶつけて主張するものとは限らない。

1960年代のブルースロックから80年代初頭のパンクまでのロックは社会への不満を表現するのに適していた。だがその後ロックは社会性を失った。それに代わってラップが出てきた。それでも最初は、男性がラップを歌うことはあっても女性が歌うことは稀だった。しかし近年は女性ラッパーが増えた。世界的にそうであり、日本でもそうである。

韓国でも以前は「恨」(はん)が文化の基底にあると言われ、歌もそうだった。韓国人は歌が上手く、日本の有名な歌手は在日が多い。「恨」の感情を情熱的に歌う能力が優れている。その精神はラップにも適している。

また韓国では男女の賃金格差がOECで一番大きいらしく、そのことも女性ラッパーの増大に影響しているかもしれない。

私はラップを聴いたことがあまりなかったので、女性にラップが広がっていることにもこれまで無関心だった。ただあるとき、「へえ」と思ったことがあ

る。重盛さと美がラッパーだと知ったときである。私が重盛を最初に知ったのは結婚情報会社の広告である。「ああ、こういう普通にきれいだけど30歳を過ぎても結婚しない人っているよなあ。見事な配役だなあ」と感心したのである。それでこの女性は女優なのか何なのかと思い検索した。すると彼女はラッパーだったのである（グラビアアイドルでもある）。へえと驚いた。広告の重盛とラッパーの重盛とは別人だったからだ。彼女のインスタを見ると完全にストリート系でありK-POP系だ。

だからといって私はそのときはK-POPにもラップにも関心を持たなかった。リサとジェニーのラップを聴く（見る）までは。

### ●男はみんな鼻血ブー

ブラックピンクの歌詞は、先述したように男勝りの強気の女性の立場から書かれているものが多い。その典型がラップを中心に歌われる「ボンバイヤー」という曲である。「ボンバイヤー」のジェニーのラップはこうだ（私の意訳）。\*ボンバイヤーはコンゴなどの中央アフリカ地域で広く使われているリンガラ語の「BOMA YE（ボマ・イエ）」が英語風に訛った言葉で「やっちまえ！」という意味だそうだ。プロレスのアントニオ猪木がテーマ曲でも「猪木！ボンバイエ！」と歌われる。

うちはビッチ  
うちは熱い  
子どもは不要  
男が必要  
ヒールをカツカツ  
ジャジャンジャーン！  
お店に登場  
男は釘付け  
頭ブチつけ  
鼻血をブー  
ブンブンブブブブ　ブブッブーン！  
ヘネシー乾杯  
チャチャッチャーン！

威勢の良い歌である。「鼻血ブー」のところは、ハングル音では「パンパンパン」「ランパンパラパラ、ラパッパン！」とはじけまくる。韓国では鼻血がずいぶん派手な音だなと感心する。キムチのニンニクのせいか。

それは冗談として、昔風に言えばスケバンみたい、バブル時代ならディスコの

お立ち台で大人気の女性、今なら人気キャバ嬢のお出ましかという歌詞だ。

マンガやドラマならありそうなシーンだが、歌謡曲やJポップではおそらくあまり聞いたことがない。ハングル語は日本語同様オノマトペ（擬態語・擬音語）が多いそうで、それがラップの強烈なリズムと合っている。しかもハングルは日本語のような男女の言葉遣いの違いがあまりない。だから強気な女性の言葉を歌詞にしやすい。

日本語だと、かの山口百恵の「プレイバックパート2」でも「馬鹿にしないでよ そっちのせいよ」と「よ」が付いてしまうから、勢いがそがれる。歌詞をネットで調べれば意味もわかるから、日本人の女子も意味がわかってブラックピンクを推しているのは間違いない。

「プレイバックパート2」は1978年の歌である。荒井由実の「卒業写真」は75年、同じ75年に太田裕美の「木綿のハンカチーフ」が大ヒットしている。

「木綿のハンカチーフ」は東京に出て行く男性を「都会の絵の具に染まらないで帰って」と女性が歌う。

「卒業写真」は「人ごみに流されて変わってゆく私を あなたはときどき遠くでしかって」と女性が歌う。男性と女性が逆転している。そこに新しさがある。75年は「国連国際婦人の10年」の最初の年。社会全体として女性の権利の拡大が叫ばれた時代が始まった。だから女性は都会で一人で暮らし、働き、変わっていく。もちろんまだ、変わら自分をしかってと女性が言わねばならない時代だった。

それから3年後、「馬鹿にしないでよ」と怒鳴る女性が現れた。だがやはり女性は「あなたのものとへ」帰る時代だった。そこから50年近く経って、女性はラップという表現手段を手に入れたのだ。

ラップとフェミニズムには関係があるのかもと私は思った。調べて見ると雑誌『ユリイカ』が「フェミニンラップ」という特集を2023年5月号で組んでいた。私がブラックピンクに目覚めたころだ。『わたしはラップをやることに決めた』という本（つやちゃん著）も買った。これは女性によるラップの入門書としてもすぐれていて、とても参考になった。現代はどんな社会現象・文化現象も女性の視点から分析・批判される時代であるが、ラップにもそうした動きがあると知った。

ブラックピンクのラップはかなり商業化しているとも言えるし、メンバーは皆セレブになったので、純粋なラップファンの中にはブラックピンクのラップを邪道だと思っている人もいるかもしれないが、そのへんの話は省く。商業化しているからこそ、ブラックピンクなどのK-POPでラップに、特に女性のラップに目覚めた人も多いだろう。私もそうだ。貧困への不満はブラックピンクには

歌えないかもしれないが、女性への差別についてなら歌える。

●昔の日本にはオノマトペを使ったスピーディーな曲があった

私は歌が好きだから考えたが、オノマトペをアップテンポのリズムにうまく乗せて売れた歌というと、朝ドラにもなった笠置シズ子の「東京ブギウギ」が最初だろう。

トオキヨ ブギウギー リズム ウキウキー  
ココロ ズキズキ ワクワクー  
(リズムを強調するためカタカナだけにした)

見事だ。さすが服部良一。彼が今若ければブラックピンクの歌をつくったに違いない。

悪乗りで言えば、服部良一が有名芸者の市丸にブギを歌わせたのが「三味線ブギ」だ。

三味線ブギーで シャシャリコ シャンシャン  
さあさ踊ろよ ブギウギ ウキウキ  
浮いた浮いたよ シャシャリコ シャンシャン  
踊るアホオに踊らぬアホだよ  
同じアホなら踊らにゃソンだよ  
さあさー 猫もしゃくしも ブギウギ  
ハ チョイと ブギウギ  
(リズムを強調するため表記を変えた)

小唄とのあまりの違いに市丸が呼吸困難になったというハイテンポな歌だ(youtubeで見て下さい)。しかもオトマトペ以外の、浮いた、踊る、アホ、ソン、チョイと、などの言葉もオノマトペ的に聞こえる。日本語の特性を活かしきった名曲だ。

何が言いたいか。80年前の曲にはこんな軽快なリズムと日本語の特性を活かした曲があるのに、こんなリズミックでオノマトペを活かした曲は意外にないなと思うのだ。

唯一思い出すのは、ドリフターズの「いい湯だな」である。

バババンバ バンバンバン  
バババンバ バンバンバン

アー ビバビバ  
ババババ バンバンバン  
ババババ バンバンバン  
アー ビバノンノン  
いい湯だな アハハン  
いい湯だな アハハン  
湯気がてんじょから ポタリと背中へ  
つーめてえな アハハン  
つーめてえな アハハン  
ここは北国 のぼりべつの湯  
(リズムを強調するため表記を変えた)

「ババババ バンバンバン」も「アハハン」もオノマトペではなく掛け声だが、音としては一緒である。そして民謡風である。そこにモダンが加わって元気がよい。高度成長期だからだということもあるが、今の日本人より明るい。シャンシャン、バンバン、アハハンと、日本人が好きな「ン」の音が多用されて、どんどん景気と元気が良くなる。

そのかわり社会への不満は歌わない。不満の表現は、フォーク、ロック、パンクと受け継がれて、ラップに到った。

今の日本にも貧困はあるが、貧困を歌う歌は少ない。昔は「昭和枯れすすき」「神田川」などがあった。今の日本で貧困を歌うとしたらラップなのだろう。売れ筋重視のJポップでは貧困の歌は出せない。そのかわり生きづらさが主題になる傾向は90年代末の浜崎あゆみなどからずっと今も続いている。

ただしメディアはCDやテレビからネット上に移った。私はまふまふの「命に嫌われている」という曲が好きだが、2020年にはAdoの「うっせえわ」が大ヒットした。YouTube再生回数1億回、ニコニコ動画では500万回再生。デジタルセールスは累計30万ダウンロード、ストリーミング再生回数は3億回を突破したという(wiki)。音楽的にはラップではないが詞の世界はラップだろう。

なかでもAYA a.k.a. PANDAの曲「猫だったっけな(犬ではない)」は女性が男性から求められる役割を演じている様が詞になっていて、誰にも意味がわかりやすいので紹介する。

紙も化粧もナチュラルに  
わかることも わかんないふり  
得意げな話 花が咲き

さらに何回聞いたかもわからん  
なのに、やばいね、すごいねってうなづいて  
あご引いて、笑って、ほら上目づかい  
盛り上げるより机見て  
取り分けるような子が好み  
大体そう 大体そう 毎回こう  
でもひとくくりにされるのは嫌なもんだ  
頼まれてもいらないのに猫かぶって  
雑誌かなんかの真似をして  
なんだかちげーって わかっちゃいる  
あれ、猫だったっけな?  
私、猫だったったけな?  
個性見失って量産型  
(仮名づかいを少し変えた。詞の一部を抽出した)

男性が好む坂道系の女性、それを自分も演じてしまうが、ほんとはこんなのが嫌だという心理。AYA のけだるい歌い方が北関東ロードサイド的な退屈な日常を思わせるなと思ったら、やっぱり埼玉県出身だった。

### ●K アート

ブラックピンクの曲には韓国的以外にも多様な民族的なものが入っている。曲だけでなくダンスもそうで、未開社会のダンスかと思える要素も多い（たとえば「ボンバイヤー」）。ミュージックビデオの演出や服装も未開社会風、反対に未来社会風、あるいは夜の大都会の路地裏、爆発する炭鉱、コンクリートの分厚いスラブでできた舞台（）、猛獣をつかまえる鉄の巨大なわな（KILL THIS LOVE）、韓国朝廷風（ピンクヴェノム）、リサならタイ風などなど、同じ曲の中でも様々な要素が混じり合う。

普通は曲のイメージに合わせて、路地裏なら路地裏、海辺なら海辺というように舞台がほぼ統一されると思うが、ブラックピンクはそうではない。万華鏡を見るように様々な映像がキラキラと変化する。野間秀樹も書いている。

「神殿のごとき場面から、古典的であったり、未来派的であったり、予定調和は徹底して拒まれる。雪と氷の空間から、色彩の密集する熱帯空間まで、変容に次ぐ変容、大きな物語がありそうで、それでいて全体は茫漠としている。激しく撃たれるビート。チョゴリからブーツまで、見たこともないような鮮烈な衣装、衣装。そして圧倒的な身体性。そうした時空間に私たちが呼び込まれる仕掛けである。」

これはすでにK-POPとか音楽といったジャンルにとどまるものではなく「Kアート」だと野間は言う。たしかにそうだ。これは総合芸術なのだ！

ブラックピンクのライブを大阪で見たり、DVDやネットで多数の動画を見てみると、私の乏しい経験では、きらびやかで元気の良いブラックピンクのライブに匹敵するものがあるとすれば、ずいぶんと昔に見たアース・ウインド&ファイヤーの武道館ライブだけである。

### ●下品なほど世界標準

次に韓国のエンターテインメント企業の意欲について書きたい。タイでグローバルオーディションを開催して才能を発掘し、ハングル語はもちろん英語でも日本語でも歌えるアーチストとして何年もかけて育て、世界ツアーや大成功させ、音楽だけでなく全員をハイブランドのファッショナアイコンになるほどのセレブにまで登り詰めさせたという、グローバルなエンターテインメントビジネスへの強烈な戦略である。

日本で坂道系アイドルがどうのこうのと言っているのが、いかに内向きなことが思い知らされる。AKBや坂道系はアイドルの甲子園だとプロデュースの秋元康は言う。学芸会だと揶揄されることも多い彼女たちだが、その中でも選び抜かれてきた実力者であることは間違いない、高校野球で言えば甲子園に出場したに等しいのだ。

だが、ブラックピンクを見ると、これは野球で言えばWBCで感動の優勝をした侍ジャパンを思わせる。甲子園でも日本シリーズでもなく、最初から世界が舞台なのだ。

私はブラックピンクを見ながらずっと考えた。たとえば1996年から4年間一世を風靡した日本の女子ダンスユニットSPEEDは、なぜブラックピンクのようになれなかったのだろう。曲だってダンスの能力だって劣っているとは思えない。デビュー当時12歳から15歳だったメンバーにブラックピンクのようなセクシーなダンスは無理だったとしても。沖縄から東京に出てくるのが目標であっても、世界を目指すところまでは目標になっていなかったのではないだろうか。あくまで甲子園なのだ。そして甲子園で満足という風潮は坂道系で極まったのではないか。本当ならSPEEDに次いで、世界で活躍するダンスグループが登場してもよかったのに（もっと昔のレ・ガールズのほうがSPEEDよりセクシーでK-POPに近い。特に由美かおるは今ならベビーモンスターのチキータと争えるだろう）。

それからブラックピンクの場合、その世界観は明らかにアメリカ的世界観の中にいる。そこが日本のアイドルと違う。世界を制覇しようとすれば、アメリカ的世界観を肯定することは必須である。**アイスクリームという？曲のビデオで**

はアメリカの 1950 年代の黄金時代のモチーフが使われている。巨大なピンクのアメリカ車、カラフルなアイスクリームなどなど。そして先述した欧米の高級ブランドやファッショントマガジン『VOGUE』などなどもまた成功の印だ。たとえそれが虚栄であっても、そこを避けて通ることはできない。だからこそリサのソロ曲「マネー」は成功の尺度がお金であることを堂々と表現する。

こういう一種の恥じらいのなさが日本には欠けている。それは美德だ。しかし、日本人はとても内向きに見える。近年日本から海外への留学生が減ったこととも関連している。成功はしなかったがピンクレディーはラスベガスに行き、松田聖子は世界最高のテノール歌手プラシド・ドミンゴと共演した。そういう意欲が今の日本にはあまり感じられない。

一流ジャズ歌手になってニューヨークデビューだってできたかもしれない美空ひばりを演歌歌手にとどめてしまった時代と変わらない一種の鎖国意識が今も日本にある。ちあきなおみだって世界のシンガーになれただろうし、藤圭子はジャニス・ジョプリンのようなロックヴォーカリストになれたかもしれないのに。国内で確実に売れることだけが重視されてしまう。内向きな企業の論理が個人の能力にフタをする。

たしかに日本のガールズダンスグループ X G はコーチェラで人気だったが、彼女たちのファッションはパンク風であり、モード風であって、これでは多数派の支持は得られない。多数派の支持を集めるためには坂道風にならざるを得ない日本で、個性を発揮しようとするとパンク風やモード風になってしまふ。つまりいわゆる「個性派」になる。K ポップのように女性らしくセクシーでありかつ攻撃的で強い女性像を提示しながら多数派の支持を得ることが日本では難しい。

### ●紅白歌合戦をやっている場合か

もちろん韓国社会には問題が多い。国民の平均所得は日本を抜いたらしいが、格差も激しい。2023 年の合計特殊出生率は 0.72 だ。国家運営がうまく行っているとは言いがたい。うまく行っていないからこそ必死で世界戦略を考えるのだろう。映画もそうである。

たしかに日本はポケモンなどのゲームでは世界市場を席巻している。そして世界中に日本ファンを作った。だがそれはリアルではない。やはりリアルな人間が活躍しないと、本当の意味で国力・ソフトパワーの実感はできない。

そう考えると日本の将来がますます不安になる。中国、韓国に抜かれるどころか、タイにもベトナムにもインドネシアにもどんどん抜かれていくかもしれない。

国連の 2100 年の国別人口予測によれば

インド	15 億 3,340 万人
中国	7 億 7,130 万人
ナイジェリア	5 億 4,570 万人
コンゴ	4 億 3,090 万人
アメリカ合衆国	3 億 9,390 万人
エチオピア	3 億 2,320 万人
タンザニア	2 億 4,390 万人
エジプト	2 億 510 万人
ニジェール	1 億 660 万人
スーダン	1 億 4,160 万人
アンゴラ	1 億 3,250 万人
ウガンダ	1 億 3,190 万人
ケニア	1 億 1,240 万人
モザンビーク	1 億 590 万人

そのとき日本は 7380 万人である。インドの 20 分の 1、エチオピアの半分である（国立社会保障・人口問題研究所の推計では出生中位推計で 6,278 万人）。日本の地位が低下するのは間違いない。

そこで私は 24 年 11 月タイ・バンコクに行った。リサのような世界的なスターを生んだタイがどれくらい発展しているかを知りたかったからだ。

バンコクのショッピングモールが凄いということは噂に聞いていた。実際凄かった。規模も大きいが、それなら中国にもある。バンコクはセンスがいいのだ。特に色のセンスが素晴らしい。

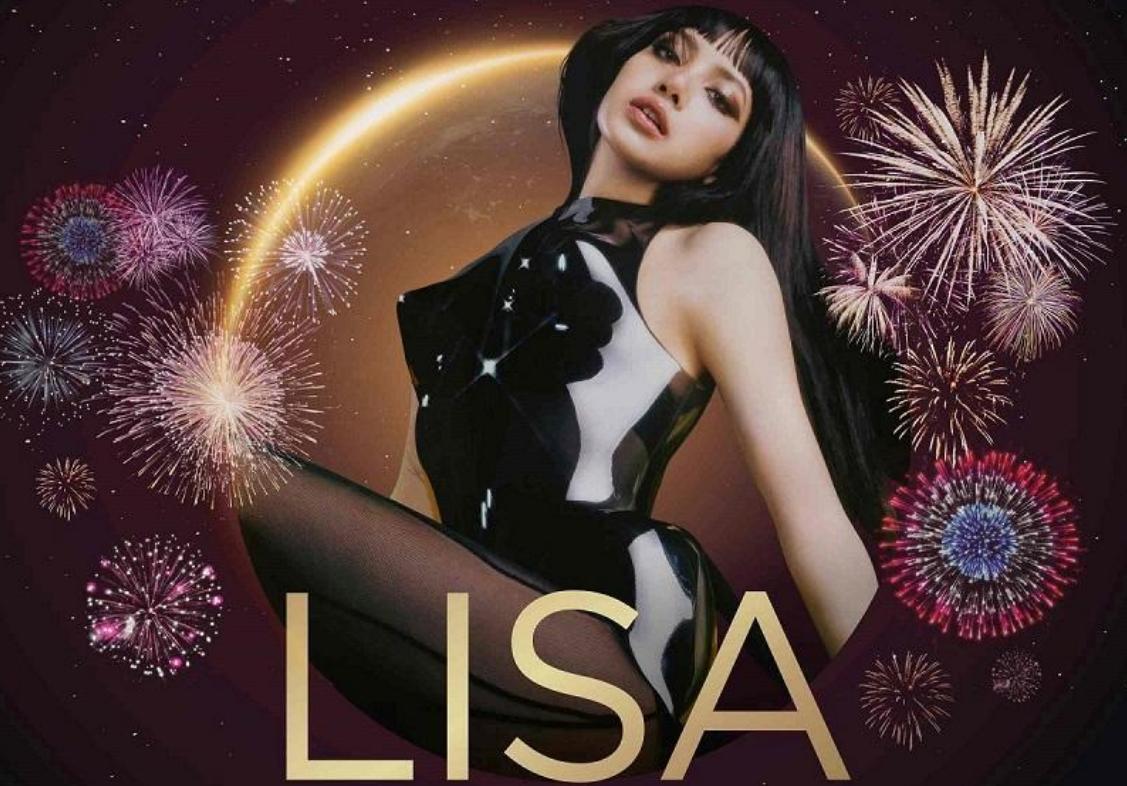
とりわけ 2018 年にできたタイ最大級の再開発アイコンサイアムにはタイで最も高い高層ビルが 2 棟ある。もちろんビルならどこにでもある。それより階下のショッピングモールが世界最高の商業空間である。そしてそこで行われた 24 年 12 月 31 日のカウントダウンイベントのトリは、なんとリサだった。このカウントダウンイベントは世界中に報道されている。リサはそれだけのスターなのだ。日本に於ける大谷翔平以上だろう。だがそんなことを日本人の 99.99% は知らず、すでに無意味化した紅白歌合戦を同じ時間に見ていた。

世界中の情報が瞬時に共有される時代になっているのに、紅白は日本がアジアの小国であった時代のモデルで番組を作っている。もう売れないビジネスモデルを捨てられずに衰退する日本の各種大企業の姿が紅白に被って見えた。



バンコクのショッピングモール「アイコンサイアム」の地下売り場。タイの 63 県ごとに名産食品を売る。タイのすべてのハッピーを体験して」というキャッチコピーが成長する国への勢いを感じさせる

AMAZING   
THAILAND COUNTDOWN 2025



LISA

GLOBAL THAI-CONIC CAPTIVATING HERO  
AT ICONSIAM, THE GLOBAL COUNTDOWN DESTINATION

31 DEC'24 + RIVER PARK

ICONSIAM



アイコンサイアムでの 2024 年のカウントダウンコンサート

